

\*答えは解答用紙に書きなさい。

次の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- 1 神仏のごカゴを願う。
- 2 職人さんのエンジュクの技。
- 3 オウボウな振り舞いは許さない。
- 4 インカ関係は認められない。
- 5 日々努力して実力をヤシナう。
- 6 質問は一切ことわっている。
- 7 国会で野党が質問する。
- 8 異郷の地で楽しかった日々を思い出す。
- 9 インフルエンザが猛威を奮う。
- 10 復興の重要性を説いて聞かせる。

次の1～6の言葉の意味に近いものを後の語群からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 油を売る
- 2 一挙兩得
- 3 二兎を追うもの一兎をも得ず
- 4 無我夢中
- 5 水を差す
- 6 気が引ける

- 語群
- |        |           |          |           |        |
|--------|-----------|----------|-----------|--------|
| ア 没頭する | イ 横やりを入れる | ウ あげ足を取る | エ あぶはち取らず | オ 一石二鳥 |
| カ 遠慮する | キ 怠ける     | ク 味をしめる  | ケ 焼け石に水   |        |

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

井谷というのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たちが行きつけの美容院の女主人なのであるが、縁談の世話が好きと聞いていたので、幸子がかねてから雪子のことを頼み込んで、写真を渡しておいたところ、先日セットに①行ったときに、「ちょっと奥さん、お茶につきあってくださいませんか」と手の空いた隙に幸子を②誘い出して、ホテルのロビーで初めてこの話をしたのである。実はこちらへご相談をしないで悪かったけれども、ぐずぐずしていて良い縁を逃してはと思ったので、お預かりしてあったお嬢様のお写真をなんともつかず先方へ見せたのが、一ヶ月半ほど前のことになる。それきりしばらく音沙汰がなかったので、自分は忘れかけていたのであったが、先方ではその間にお宅さんのことを調べた模様で、大阪のご本家の

こと、御分家のお宅さんのこと、それからご本人のことについては、女学校へも、習字やお茶の先生の所へも、行って尋ねたらしい。それでご家庭の事情は何もかも知っていて、いつかの新聞の事件なども、あの記事が誤りだということはわざわざ新聞社まで行って調べてきているくらいなので、よく了解していたけれども、なお自分からも、そんなことがあるようなお嬢様かどうかまあお会いになってご覧なさいといって、納得がいくように③説明はしておいた。④というような話なのであった。

(谷崎潤一郎『細雪』)

語注

\*セット・・・髪を整えること。

問一 ——線部①～③の動作をしているのはだれですか。適当な人物を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 井谷      イ 幸子      ウ 雪子      エ 先方

問二 ——線部④「というような話」とありますが、話の始まりに当たる部分を本文中から五字で書きぬきなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、字数に関する問いは、句読点や記号もすべてふくみます。(設問の都合上、本文を一部変更しています。)

#### 四

「ねえ、亜樹」

お昼休みのことだった。亜樹と藤本さんは図書室で本を読んでいた。

「きょうの帰り、うちに遊びにこない？」

最近の亜樹は、国語の成績がわるいのは読書不足のせいだと考えて、お昼休みは、藤本さんといっしょに本を読むようになっていた。「正確にはおばさんの家だけど、うちのおばさん、小さい喫茶店やってるんだ」

亜樹は本から顔をあげて、えんりよがちに話す藤本さんを見ていた。

「チーズケーキ、こちそうするよ……」

「いきたいー」

思わず、大きな声をだしてしまふ。しずかな図書室にとつぜんひびいたその声を①たしなめるように、カウンターの図書委員が亜樹を軽くにらむ。

「いくいく、絶対いく」

あわてて声をひそめると、②藤本さんはホッとしたようにうなずいていた。

藤本さんが亜樹をさそうなんて、初めてのことだった。最近の藤本さんは、亜樹に自分から話しかけてくるようになっていた。

亜樹が読書を始めようと思うのだけど、どんな本を読んでいいかわからないと相談したのがよかつたのかもしれない。そのつぎの日にはもう何冊が見つくろって、自分の本を貸してくれたのだ。

そして一冊読み終えて本を藤本さんに返すたびに感想をいいあうのが、最近ふたりの会話を多くしていた。

だけど、藤本さんがさそうなんて初めてのことだ。

先月の高校の文化祭は、亜樹がさそって楽しくすごせたけれど、じゃあまたどこかにいっしょにでかけようという会話はふたりの中からはでてこなかった。亜樹としては「まあ、無理しなくてもいいや」とそんなふたりの関係に不満を感じていなかったし、特別な理由がないのに自分からさそって断られたときのショックを考えるとやっぱり③腰がひけた。

だから藤本さんのおさそいに、亜樹は興奮した。うきうきして午後の授業に集中できないほどだった。

藤本さんのいうとおり、その喫茶店は、住宅街の中にぼつんとある小さい店だった。ドアを開けると、陽気な感じのおばさんがここにこして、ふたりをでむかえた。

「こんにちは、亜樹ちゃん。待ってたのよ」

亜樹はおばさんにうながされるまま、窓際の席にすわった。

「ナッツ。わるいけど、先に弾いてくれない？」

おばさんはそういうと、藤本さんにバイオリンをおしつけるようにわたした。

「ええっ、わたしまだ、亜樹になにも話してないんだよ」

「でも、沼崎さんなんて、ナッツの演奏ききたいって、もう二時間も待ってるのよ」

藤本さんが、困った顔をして亜樹を見る。亜樹は状況がつかめないながらも、様子を察して笑顔でいった。

「わたしはいいよ」

すると藤本さんは申し訳なさそうに「あとで話すね。ちゃんと、話すから……」と行って、カウンターの横にあるピアノのほうにむかった。

「大変お待たせいたしました。未来のバイオリニスト、藤本奈津美のバッハリサイタルです」

おばさんがそういうと、お店の中にいたお客さんたちが拍手をした。亜樹は「バイオリニスト？」と混乱しながらも、とりあえずいっしょに拍手をおくった。

藤本さんはピアノにすわったおばさんのそばに立つと、おもむろに左手に持っていたバイオリンを肩の位置まで持ちあげてかまえた。その顔つきは、教室で見るとは藤本さんとは表情がちがっていた。きりりときびしい顔をしている。右手に持っていた弓を大きくあげて、バイオリンの上に弓を置く。そして、その弓を手前にゆくりひくと、美しい音がした。それは強くて大きくて、凜とした音色だった。

そうしてしばらく音の具合をみると、藤本さんはおばさんのほうをむいてうなずいた。おばさんがそれを合図にピアノを弾き始める。つづいてその音のるように藤本さんが音を鳴らし始める。

演奏がはじまっていた。

亜樹は藤本さんを見つめつづけた。すくくと立ってどうどうと演奏しているその姿から目がはなせない。④そこにいるのは確かに藤本さんなのに、まるでちがう人みたいだった。

自分の奏でる音にあわせて、身体がしなったり小さくなったりおおきくなったりする。表情もやさしくなったり、けわしくなったり、苦しそうな顔をするこもあつた。

亜樹の知ってる藤本さんは、いつもおだやかでおとなしいだけだった。人前でこんなにどうどうと演奏できるような子じゃないはずだった。

まるで別人。そして格好いい！

曲は全部で三曲だった。

演奏を終えて、藤本さんとおばさんが並んでおじぎをすると、十人ほどいたお客さんから拍手がわいた。亜樹は最初から最後まで、まばたきするのもおもしろいと思うくらいに、藤本さんを見つめつづけていた。目が痛いと思いつつながら時計を確認すると、演奏時間は十分ほどだったけれど、亜樹には本当にあつというまだった。あまりに集中して見つめつづけたので、まるで自分が演奏したかのように

つかれていた。

ぼうぜんとしていると、藤本さんが亜樹のほうにもどってきた。その顔はもう、教室で見るいつもの藤本さんにもどっている。「すごい、夢じゃないよねえ」

亜樹は藤本さんをながめながら、両手で頬をぺちぺちたたいてみせた。藤本さんは、亜樹のおむかひの席にすわると、水をゆっくり飲んで自分を落ちつけてるみたいだった。

「緊張した？」

水を飲み終えた藤本さんの顔をのぞきこむようにしてきく。

「うん……亜樹が見てるから、緊張した」

藤本さんが、遠慮がちにこたえる。

「わたしも緊張してた。ほら、汗かいてる」

亜樹がさしたしたてのひらを、藤本さんがそっと指でなでる。亜樹が、ねっ？ という顔をしてみせると、藤本さんは目を大きく見開いてびっくりした顔をしてみせた。

「夢があるって、素敵ねえ」

そんなふたりのそばを、演奏をきいてたお客さんがレジをすませて帰っていく。

「今からサイン、もらっとかなきゃな」

そんなふうについて藤本さんにウインクするおじいさんまでいた。

「バイオリニストになるんだ……」

藤本さんがバイオリンを弾くことさえ知らなかった亜樹は、ただただ感心するばかりだった。

ちゃんとした夢があるんだ。将来のこと、ちゃんと考えてるんだ。おとなしいだけの子じゃなかったんだ。こんな必殺技かくし持ってたんだ。すごいな。いいな。うらやましいな……。だけど、

⑤でも夢があるっていわれるのが、「番イヤ」

⑥藤本さんの声は意外にも暗かった。

「うちは、親も親戚もみんな音楽やって、だから小さいときから自然にバイオリン始めて、高校も音楽科のあるところをうけるんだけど……でも、それってたまたまなんだよね」

そういって、自信なさげにうつむいている。

「みんながなんともなく普通科の高校を受験するのと同じで、とりあえずいけそうだからいってみようかなっていうくらいで、本当にこのままずっとバイオリンを弾きつづけていくのかなんて、わかんないよ」

藤本さんは、バイオリンを弾いているときの凛々しい感じとも、教室でひとり読書をしているしずかな感じともちがう一面を、亜樹に見せていた。

「でもね。わたし、一年ときにいじめられてたことがあって、そのときはバイオリンが自分の支えだったんだ」

それもまた初耳だった。

「運動会のクラス対抗リレーで転んじゃって、それがきっかけでつぎの日から女子たちにひたすら無視されちゃう程度のもだったんだけど……」

亜樹はなんて言葉をかけたらいいかわからなかった。

「そのときは、教室にいるときは本を読んで物語の世界に没頭して、家に帰るとくるったようにバイオリンを弾きまくったよ。弾いているときは、曲が持っている物語の中ににげられるから……」

そのかわりに亜樹は、必死で藤本さんの言葉に耳をかたむけた。ひとこともききのがさないように集中した。藤本さんをきちんと知りたいから。

「だから夢があるっていうより、バイオリンにげてきたって感じなんだよ。こうして人前で弾けば、ほめてもらえて優越感も得られて、わたしはただのいじめられっこじゃないって自分を説得できたし……」

藤本さんは話しながら、どんどんうつむいてしまう。

「そっか……」

亜樹はそんな藤本さんの告白をききながら、自然と「卓球」のことを思いだしていた。藤本さんにとっての「バイオリン」と自分にとっての「卓球」が似ている気がしたから。

「わたしも……卓球ににげてたのかな」

亜樹はテーブルにひじをつけて、自分のあごをささえた。

「お姉ちゃんが中学でバスケットを始めたら、人がかわったように格好よくなっちゃって、わたしも中学にはいったらお姉ちゃんみたいに夢中になれるものを見つけて、かわりたいって思ったんだよね」

亜樹の言葉に、藤本さんがゆっくりと顔をあげた。

「卓球になんとか憧れがあったし、実際夢中になって一生懸命に練習したけど、ちっとも格好よくなんかならなくて……。だけとお姉ちゃんみたいに県大会まですすんだら、なにかかわるんじゃないかって期待して、でも結局実現しなくて……。でも今思えば、そうやって夢が実現したからって、人の性格なんてかわらないよね」

それは「卓球」と「バイオリン」を重ねてみせることによって、藤本さんをはげますような言葉がでてこないかなと期待して話したはずだった。

「夢が叶ったからって、別人になれるわけじゃないもんね」

でも話しているうちに、気がついていたら思ってもみなかった言葉がとびだしていた。亜樹は自分の言葉にハッとした。

「でも、亜樹は今のままで十分だと思う」

すると藤本さんがきっぱりといった。

「かわる必要なんて、全然ないと思う。ただ、もっと素敵になりたいって気持ちわかるし、卓球で輝きたかった気持ちもわかる」

亜樹は小さくうなずいた。

「でもやっぱり夢が叶うのと、その人が素敵な人かどうかってべつなんだよね」

その言葉に亜樹はしびれた。つながつたと思った。同じふうに考えてる。同じように感じている。

「わたしが演奏してみせれば、お客さんはわたしのことをすごいってほめてくれるけど、それはバイオリンを弾くわたしがすごいだけで、バイオリンを弾かなくなったら、わたし自身はすごくもなんともないんだよ」

亜樹は顔をあげて大きくうなずいた。

そうなのだ。あの夏の大会で、試合に勝ったとしても、きっと自分はかわらなかった。県大会にすすんだからって、別人にはなれない。素敵になれるわけでも、輝いてる人になれるわけでもない。

「わたしがバイオリンを弾かなくなったら、お客さんはかたんにはなれちゃうんだよ。今みたいに慕ってなんてくれないんだよ」

「でも、わたしははなれないよ」

つながつたことに興奮して、亜樹はてもせずつぶやいた。

「バイオリンがこんなに上手だって知ってすごいと思ったけど、わたしにとっては、それよりきょう、こうしてさそってくれたことのほうがうれしかったから。藤本さんがバイオリンを弾かなくなっても、わたしははなれないよ」

亜樹はまっすぐに藤本さんを見つめた。すると、藤本さんは姿勢を正して顔をあげた。

「ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそです」

亜樹も同じように顔をあげた。そしてふたりは顔をあげると一瞬見つめあって、そして同時にクッククックと笑いだした。それは自分たちのおかしなあいさつがおかしくて笑ったのだけれど、わかりあえたことがうれしくて、くすぐったくて、うれしくて、うれしくて、ふたりはいつまでも笑うのをやめられなかった。

「まあ、楽しそうねえ」

するとそこにナイスタイミングで、おばさんが登場した。おしゃべりがとまらなくて、ささいなことでも、大きな声で笑う元気のいいおばさんだった。

おかげでそのあとふたりきりではゆっくり話せなくて、ようやくおばさんのおしゃべりが終わったときは、あたりはもうすっかりうす暗くなっていた。

「もう、ごめんね。うちのおばさん、しゃべりだすととまらなくて」

どうしても途中まで送るといふ藤本さんと、夕闇の中を並んで歩く。

「ナッツって呼ばれてるんだね」

「えっ？」

早口でいった亜樹の言葉を、藤本さんはうまくききとれないようだった。だけど、亜樹は気にせずつぶやいた。

⑧ わたしも、これからナッツって呼ぼうって

いつもいっしょにいるのに、よそよそしく苗字で呼んでるのが、本当はずっと気にかかっていたのだ。

「もうここまででいいよ」

つぎのセリフを思いうかべながら、立ちどまる。

「じゃあね、ナッツ。バイバイ」

亜樹はうす暗くなってよかったと思った。きつと、顔が赤らんでいるはずだから。

「うん、バイバイ」

藤本さんも、てれたように笑っている。亜樹はかけだして、少しはなれたところでもう一度ふり返った。

「ナッツ、またあしたねえ」

「うん、あしたねえ」

亜樹は再び走りだした。耳の奥に、バイオリンの音色がかすかにのこっていた。

(草野たき『リボン』)

問一

- 線部①「たしなめる」③「腰がひけた」の意味として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。
- ① たしなめる                    ア おだやかに注意する。                    イ きちんと確認する。                    ウ 厳しく非難する。                    エ 心の中で怒る。
- ③ 腰がひけた                    ア はずかしかった。                    イ おどろいた。                    ウ つまらなかった。                    エ ためらった。

問二

——線部②「藤本さんはホッとしたようにうなずいていた」とありますが、なぜホッとしたのでしょうか。その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 藤本さんは、亜樹が読書の最中に声をかけられたことに腹を立てていると思ったから。
- イ 藤本さんは、自分の初めてのさそいに亜樹が乗ってくれるかどうか自信がなかったから。
- ウ 藤本さんは、亜樹が大きな声ではなく、小さな声で話してくれたことに安心したから。
- エ 藤本さんは、自分から亜樹に話しかけたのは初めてだったので、緊張してしまっただけから。

問三

——線部④「そこにいるのは確かに藤本さんなのに、まるでちがう人みたいだった」とありますが、亜樹は藤本さんをどのような人だと思っていますか。亜樹が以前から知っている藤本さんを表している部分を「くの人」につながるように、本文中から十二字で書きぬきなさい。

問四

——線部⑤「でも夢があるっていわれるのが、一番イヤ」とありますが、藤本さんがそのように感じたのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア いじめられていた時はバイオリンが自分のにげ場所だったが、周囲の人々が思うほどにはバイオリンを弾くことが本当は好きではないから。
- イ いじめられていた時はバイオリンが自分のにげ場所だったが、バイオリンを弾く時に曲の持つ物語の中ににげるのがまんならなかつたから。
- ウ 周囲が音楽をやっていたので自然にバイオリンをはじめたが、バイオリンは夢というよりもいじめられていた時の自分の支えだっただけだから。
- エ 周囲が音楽をやっていたので自然にバイオリンをはじめたが、サインを求められるほどのバイオリニストになるという夢を全く持っていないから。

問五

——線部⑥「藤本さんの声は意外にも暗かった」とありますが、亜樹がそのように感じたのはなぜですか。「意外にも」に注目して、五十字以内で理由を答えなさい。

問六

——線部⑦「つながった」とありますが、同じ意味で用いられている言葉を本文中から六字で書きぬきなさい。

問七

——線部⑧「わたしも、これからナッツって呼ぼう」とありますが、なぜそのように言ったのですか。——線部「いつもいっしょにいるのに、よそよそしく苗字で呼んでるのが、本当はずっと気にかかっていたのだ」とは別の理由を本文全体から読み取って答えなさい。

## 五

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、字数に関する問いは、句読点や記号もすべてふくみます。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

数年前、毎週、歯医者さんに通っていた。歯科医院が、眼科や耳鼻咽喉科とともに、一般の病院と異なるのは、患者に年齢の偏りがないということである。お年寄りもいれば幼児もいる。ふだん間近に見ることのないそういう人たちのふるまいやたずまいを、見ることもなく観察するのは、治療前のちよっと心細い時間の中での、ささやかな愉しみでもある。

私が目撃したほほえましい光景の一つを紹介しよう。歯医者さんには、週刊誌の他に、子ども用に絵本やおもちゃが備えてある。私が目撃したほほえましい光景の一つを紹介しよう。歯医者さんには、週刊誌の他に、子ども用に絵本やおもちゃが備えてある。子どもを膝に乗せて読み始めたのだが、子どもは初めこそ絵本をのぞいていたものの、やがて気はよそに行きだした。隣の子どものおもちゃが気になってしかたがないのである。目は必死でそれを追う。

やがてお母さんは本を読み終え、子どもの気がよそに行っているのに気がついて、本を閉じる。すると、間髪入れず、子どもは「もう一回。」とおねだりする。「ちっとも聞いてないじゃないの。」とお母さんはため息をつきながら、また最初から読み始める。子どもは今度もまた眼光鋭く、隣の子の遊びを注視している。それに気がついてお母さんが読むのをやめると、子どもは「もっと。」とせがむ。奇妙なことである。聞く気がないのに、「読んで。」とせがむ。この時、子どもはいったい何を求めていたのだろうか。

たぶん、話の自身が重要なのではない。話の自身以上に、母親の声が B ということが大事なのではないか。つまりは、言葉の意味より言葉が自分に語りかけられているという \*1 シチュエーションのほうが、テキスト(物語の意味)よりテクスチュア(母親の声の \*2 肌理)のほうが。

最近、朗読の練習に通う中高年の方たちが増えているそうだ。うまくいったら、ボランティアで保育園や幼稚園に出かけ、子どもたちに語り聞かせようというわけだ。① 気持ちにはわかないでもないが、引かかる。

自分が子どもだったら、と考えてみる。一人で寝つく時、枕もとで母親が本を読んでもくれるとする。その時、よどみない朗読にはたして心はほどかれるだろうか。字を読みまちがえてもいい。劇的な抑揚はなくてもいい。途中で居眠りして中断してもいい。それよりも、読み慣れない本を、無理して、眠たいのを我慢して、読んでくれている、そういう場面に自分がいられることが心底うれしいのではないか。声がまぎれもなく自分に向けられているということが。

慣れた朗読から響いてくるのは、不特定の人に向けられた声だ。めりはりのある、緩急のある、澄んだ声。それは私に向けられていないというよりも、誰が聞いても耳あたりのよい声だ。だからふつう、それはアナウンサーや俳優・声優など、不特定多数の人に語りかけることを仕事にしている人たちが学ぶ。子どもが朗読に求めるのはそういう声ではない。自分が誰かに大切にされると感じられること、それをこそ子どもは望んでいる。

子どもは親の声の質に敏感である。学校に行くようになって、② 親の声が、社会のいちばん前の声に変わってくる。「ちゃんと宿題したら、遊園地に連れて行ってあげますからね。」「もし……できたら」という、人に対してまず資格を問う社会の最前列の声になってくる。親の顔の後ろ、声の背後に、社会が透けて見えてくる。言うまでもなく、そのような顔、そのような声に向けられるのは、自分子どもというより、社会の中の自分子どもである。「あそこのお家の○△ちゃんはちゃんとやっているよ。」と、子どももまた社会の中に置かれる。話すほうも聞くほうも、社会の〈標準〉という枠組みの中で語りだされる。

子どもが、いや大人でも、本当に浴びたい声はそういうものではない。背後に社会が透けて見えない、誰かの存在そのものであるような声、もっぱら私のみを C としている声である。そういう声のやりとりの中で、③ 人はまぎれもない〈私〉になる。〈私〉を気づかう声、〈私〉に思いをはせるまなざし。それにふれることで、私は〈私〉でいられる。

(鷺田清一「嗜みきれない想い」)

## 語注

\*1 シチュエーション・・・状況

\*2 肌理・・・感触

## 問一

- 空らん A C にふさわしい語句を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。
- A ア めざらしく I わざとらしく U 注意深く E めざとく
- C ア 中心 I 目的 U 特定 E 宛先

## 問二

- 空らん B にふさわしい言葉を、本文中から十字で書きぬきなさい。

問三

——線部①「気持ちにはわからないでもないが、引っかかる」とありますが、どうしてですか。子どもが何を求めているのか、また、中高年が何を求めているのかに気をつけて、説明しなさい。

問四

——線部②「親の声が、社会のいちばん前の声が変わってくる」とありますが、どういうことですか。次のア～オのうちから正しいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 親は、自分の子どもを他人の子どもと比較するようになる。

イ 親は、自分の子どもを条件付きでしか愛さないようになる。

ウ 親は、自分の子どもに対して社会人としての自分を示すように努める。

エ 親は、自分の子どもを社会の標準に照らし合わせて子どもを育てようとする。

オ 親は、自分の子どもに対して勉強やしつけに関心がきびしくなる。

問五

——線部③「人はまぎれもない（私）になる」とありますが、そのためにはどのようなことが必要だと筆者は考えていますか。「存在」という言葉を用いて、三十字以内で答えなさい。

——  
お  
わ  
り  
——

【 余 白 】

